

て青山師範に入学、卒業後本郷誠之小学校に奉職、教員生活を送った。昭和三年(一九二八)日本プロレタリア作家同盟に参加、教育評論を中心に精力的な評論活動を展開した。同五年教育組合事件で職を失い、プロレタリア文学運動に専心した。運動崩壊後、九年亀井勝一郎らと『現実』を創刊、これを機に筆力を回復し、短編『白い壁』を発表、作家的力量を広く認められた。同十一年武田麟太郎主宰『人民文庫』の発行名義人となり、編集担当、十三年大井広介らと『槐』創刊、同誌に長編『石狩川』を連載し、非常に好評を博した。昭和十四年七月二十三日病没。』とある。

注(3) 幼名大力、通称英橋また弾正、天保5年〔1834〕9月12日生、伊達家一門、岩出山邑主。明治2年、その弟巨理邑主伊達邦成と謀り、北海道開拓を請願し、石狩国札幌、空知2郡の開墾を許された。翌年2月先づ先遣隊を従えて渡航し、現地の分割を受けた。翌年3月2日男女160名を率いて岩出山を出発、4月4日到着し、原始の大地に挑んだ。5年3月更に旧臣182名を移住させた。辛苦艱難言語に絶したという。12年2月また56戸210名を移した。14年2月准陸軍少尉に任じ開拓使七等属に兼任された。同年5月功績顕著なりとして特旨従六位に叙せられた。移住以来、率先粉骨、地を開くこと1千町余、人を移すこと3千余人、開拓の功績極めて大なるものがあつた。明治24年1月12日歿、享年58。その子正人、父邦直の功に依り華族に列し、男爵を授けられた。大正4年11月更に正五位を追賜された。なお、邦直の業績については、「当別町史」(当別町編)に詳記してある。北海道開拓を、歴史家は「北地跋涉」〔ほくちばっしょう〕と称する。岩出山のほか、巨理伊達邦成・同家老田村顕允〔現伊達市〕・角田石川義光・泉麟太郎〔現夕張郡の内〕・白石片倉邦憲〔現札幌市内〕らの指導者のもとに、渡道したものが1,362戸、約8千人、このように多数で、しかもすぐれた成功を収めた実例は、他になかった。

資料 本庄陸男の研究(布野栄一)

60. 幾世小佐治の墓

問 幾代小佐治の墓は何処にあるのか、またこれに関する資料にどのようなものがあるか。
(1)

答 名取市の高館川上の旧東海道、青熊川に小橋小佐治橋があり、その南阿元から約50メートル離れた地点に、道路をさしはさんで、東側に小佐治の墓、西側に幾世の墓と伝えられるものがあります。墓碑には梵字が残っているだけであるが、昔は「永和二丙辰年〔1376〕三月十五日」と刻
(2)

んであったと「奥羽観蹟聞老志」(佐久間洞巖。享保4年〔1719〕)・「封内風土記」(田辺希文。明和9年〔1772〕)・「囊塵埃捨録」(遠猪走道知〔おいはみちとも、大場雄淵〕文化8年〔1811〕)に記してありますが、既に風化してしまって1字も判読できない状態になっています。そして、これらの墓の傍には、大正13年に地元の有志が建てた「烈士雄幸」「烈女幾世」の碑があります。

これら二人の悲恋伝説は、古くから人口に膾炙したもので、これに関する資料には、次のものがあります。

1. 「奥羽観蹟聞老志」(佐久間洞巖。「仙台叢書」別集)
2. 「封内風土記」(田辺希文)
3. 「囊塵埃捨録」(遠猪走道知〔おいはみちとも、大場雄淵。〕「仙台叢書」第7巻の内)
4. 「滅び行く伝説口碑を索ねて」(富田広重)
5. 「宮城県の伝説」(上掲4.の改題復刻版)
6. 「名取郡誌」(名取郡教育会)
7. 「郷土の伝承」(宮城県教育会編)
8. 「続岩沼物語」(佐々木喜一郎)
9. 「伝説」(三原良吉。「宮城県史」21の内)
10. 「宮城の伝説」(吉岡一男)
11. 「名取市史」(名取市)

注(1) 雄幸と表記する本もある。

注(2) 高3尺6寸、幅1尺5寸余、厚4寸5分。

注(3) p. 195注(9)参照。

注(4) p. 58注(1)参照。

注(5) p. 300注(1)参照。

注(6) 「宮城の伝説」(吉岡一男)に、次のように簡潔に記してある。

『笠島の実方中将の墓、道祖神を北に進むと高館に入る。その途中の田圃を見渡す道端に幾世・小佐治の古碑が道の両側にひっそりと立っている。昔ここに住む桑島長者の娘幾世が、都からやって来た小佐治を見そめ、長者に養子にと懇願されるが、蝦夷地の松前へ行く旅の途中と断わる。そこに足利諸氏から召し出しがあったが、幾世は小佐治のことが忘れられず、思いあまって川に身を投げた。小佐治は松前からの帰途それを知り、あの世で幾世と結ばれようと思い、幾世の後を追ったという。』

この小佐治幾世の伝説はまた、桑島長者物語ともいわれる。

資料 [本文後段に掲げた資料]